



とって  
把手が語る  
斜里のオホーツク文化

平河内 毅



↑ 穴の空けられた底部

← 把手付土器  
チャシコツ岬上遺跡(斜里)

ビールジョッキやマグカップなど、側面に把手のついた容器は珍しくありません。ところが、今から1,000年以上前に栄えたオホーツク文化では、普段使う容器ではなかったようです。その証拠にこれまでに発掘された膨大な土器のうち、側面に把手が付いたものはわずかに3点しか存在しません。では、これらの土器はどのように使われたのでしょうか？

**実用品？ それとも...**

把手があると便利なことと言えば、熱いものを注いだ時や、水差しのように使う場合などが思い浮かびます。しかし、古代にロマンを抱く私としては実用的な用途ではなく、儀礼や祭用の特注品でないかと、つい期待してしまいます。

そういった視点で2つの土器を見てもみると、どちらも特別なものに見えてきます。

右の土器は片方が壊れています。右の土器は片方が壊れていますが、両側に把手があり、注ぎ口も作られています。お祭の時に酒などを注

ぎ分けるための容器でしょうか。

一方、上の写真の土器は注ぎ口はありませんが、意図的に底に穴が空けられています。オホーツク文化では墓に土器を副葬する際にも同じように穴を空ける例がありますが、上の土器は墓から見つかったものではないので何か別な意図があるのでは？と考えたくなります。

ところで、オホーツク文化の人々はなぜ把手の付いた土器を作ったのでしょうか。

**お手本があった？**

これらの土器は、いずれも細長い粘土のヒモを貼り付けた模様で、オホーツク文化の後期(平安時代頃)に作られたことを示しています。それより前の時期には、側面の把手は無いため、後期に取り入れた要素と考えることができそうです。

「そうだ、把手をつけよう!」と、突然思いつくとは考えづらいので、おそらく、何かを手本にして作ったのでしょう。その手本が他文化の土

器なのか、大陸の青銅器であったのか、などを追っていくと当時の交流相手にたどり着くかもしれません。

もし、本当に手本があったとすると、3点のうち2点が見つかった斜里は、外部との交流が盛んな地域だったといえそうです。

土器を手にとると、様々な想像がふくらんでいくのですが、本当のことは当時の人々しかわからないのが悔しいところです。



注口付土器  
ウトロ遺跡(斜里)

発行 2017年6月23日  
発行所 知床博物館協力会  
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49  
斜里町立知床博物館内  
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257